

4 意見聴取会での意見発表概要

(1) 南部地区

日 時：平成19年1月14日（日）10:00～12:00

場 所：宮城県大河原合同庁舎 4 階大会議室（柴田郡大河原町字南 1 2 9 - 1）

出席者：藤村 重文委員長

意見発表者：鈴木 圭 氏

小野寺 征人委員

居坂 幸 氏

櫻井 弥生委員

山本 明德 氏

佐々木 悦子委員

高沢 忠義 氏

山田 光彦委員

松本 純 氏

佐々木 義昭委員

佐藤 則之 氏

<概 要>

鈴木圭氏

- ・ この答申の一番の狙いは仙台への進学を希望する郡部の生徒の願いを達成することにある。3 % 枠が心理的制約になっていると書かれているが、ならば5 % なり 10 % に拡大してあげれば願いをかなえられるのではないか。
- ・ 全県一学区にすると、不本意入学する仙台市内の子どもたちをたくさん生み出すことになる。500 点満点で 250 点以上取らないと仙台市内の公立高校のどこにも入れないのに、それがさらに増えることになる。また、不本意入学は子どもたちの人格形成にも影響を及ぼす。
- ・ 県立高校と地域との関わりについてであるが、伊具高校では、高校生が自らが作った野菜や花などを地域に販売し、地域はこうした高校生を温かく見守っている。そんな学校が今以上に定員割れで統廃合が進むことになる。
- ・ 答申のアンケート結果では、多くの人が自宅から無理なく通える学校に通いたいと考えている。仙台に通えるのは、学力の高い子、経済的に恵まれている子であり、経済的に恵まれていない家庭の子どもの願いをかなえるためにも、地域の拠点校をしっかりと育成することが先決である。
- ・ 県民は答申をゆっくり読む時間がない。急いで進めないで県民にもっと情報を示してほしい。

居坂幸氏

- ・ 高校生活は人生の土台として非常に大切である。学区撤廃は大変なことだ。
- ・ 地域の高校に地域の子子どもたちが喜んで希望を持って通学できることが大事である。
- ・ 地域の学校に入り、地域の中で学び育つことは、豊かな地域社会づくりにも役立つと思う。
- ・ 地域に学校があることは、地域を豊かにし、地域の人々に誇りや希望を与えている。
- ・ 全県一学区になり遠距離通学者が増えると、地域に対する愛着が生まれるのかが疑問である。遠距離通学は、時間的な負担、家庭の経済的負担、部活への影響、不登校なども心配される。
- ・ そもそも学区制は、教育の機会均等の原則を実現するために定められたものである。ほとんどの子どもが高校への進学を希望しており、豊かな高校生活を保障してあげたい。
- ・ 仙台への一極集中でなければ進学希望がかなえられないわけではない。全県一学区制にすることは、すべての高校間の格差をますます大きくし、序列化を強める。子どもたちに早い時期から受験競争のストレスを与えることになる。
- ・ どこに住んでいても喜んで通学できる地域の高校であってほしい。中学生の小さな心を悩ませないでほし

い。

- ・ 今のままの学区制で高校が地域のシンボルとして輝き、地域に愛され育まれることを願い、撤廃反対である。

山本明德氏

- ・ この意見聴取会が昨年の教育基本法改正に係るタウンミーティング同様の形式的なものにならないかを危惧している。高等学校入学者選抜審議会の意識調査も最初から撤廃を意図しているように思う。
- ・ 審議会答申の3～4ページ、今後の方向性6ページを中心に意見を述べる。
- ・ 高校教育を取り巻く諸情勢の変化 - イ（高校教育の普及と機会均等）の項目で高校進学率は98.5%に達し、学区制は成果を挙げたと書いてあり、あたかも学区制度は終わったと言わんばかりであるが、教育の機会均等こそが我々が守っていかなければならない基本的考え方である。
- ・ ロ（生徒のニーズの多様化）では、学習意欲の低下や中途退学などの問題に触れ、その解決方法を進路希望にあった学校を自由に選択できるようにとすぐに学校選択の自由を持ち出してきている。
- ・ ハ（少子化の進行）では、少子化のため、学校規模の縮小を招き、学校選択の機会が十分に確保されなくなるとの脅しのような記述があるが、だからこそ、きめの細かい指導のできる教育が必要ではないか。
- ・ 普通科高校では、進学率アップが生き残りのための至上命題になっているのではないか。学区の撤廃によって高校間の切磋琢磨が助長されるときれいな言葉で言っているが、実際は学校間の競争が激しくなり、その結果、最大の犠牲を被るのは生徒たちである。
- ・ ニ（生活圏の拡大）では、道路交通網の整備と書いてあるが、車を運転して通学している子どもがどこにいるのか。
- ・ ホ（全国の動向）では、学区撤廃が全国的な流れだと述べているが、本当に宮城の子どもたちのことを考えるのなら、他県ではどんな変化が起こっているのか調べられるはずである。
- ・ 今回の答申には、撤廃ありきの審議会の見方がある。一部のできる子に視点を当て、競争によって学力が向上するという前近代的教育観に基づくものであり、格差社会を教育の面から肯定するものである。

高沢忠義氏

- ・ 結論としては全県一学区制に移行すべきである。
- ・ 学区制については、3%枠のシステムに問題がある。3%枠には比較的優秀な生徒が集まるため、競争率が高くなり、受験生が希望を断念してしまうケースがある。
- ・ 3%で入るのが難関なので、希望校に入るために、本来希望している普通科を避け、やむなく専門学科に入り、その結果、大学進学したくともしにくい環境にある生徒もいる。
- ・ 全県一学区で懸念されているのは、特定校への集中であり、地方校離れだが、受験生が高校卒業後のことを考えて進路を選択するのは、昔も同様である。言い換えれば選択されない学校は、本人の計画に当てはまらなかったからであり、全県一学区になることで起こる現象ではない。
- ・ 問題は、危機感を感じている学校側、教育委員会等がこれまでどんな努力をし、今後どう対応していくかである。
- ・ 企業も会社存続のために努力をしており、県教委としても生徒が入学したいと思う学校づくりに本腰を入れるべきである。企業と教育と結びつけるのは短絡的かもしれないが、地元の学校が向上することを願っている。
- ・ 3%枠の拡大というのではなく、全県一学区にすべきである。

松本純氏

- ・ 学区撤廃賛成の理由を述べる。
- ・ 高校教育は義務教育ではなく、生徒ごとに入学目的が異なる。その希望をかなえるべきであり、法改正を踏まえ、県教委が判断できるようになっているのだから、本来の姿に戻すべきである。
- ・ 私自身は、岩出山中学校を卒業後、越境入学で仙台一高に入学した。サッカー部に所属し、朝5時起き11時帰宅という毎日だったが、楽しい生活を送った。希望校に入学でき、有意義な高校生活を送れたことに感謝している。
- ・ 若手の医者は、子どもの教育環境を考慮し、仙台から通勤する者が多い。全県一学区になれば、地元に住み着いて仕事をすることも考えられる。地域医療に携わる医師不足が叫ばれているが、その原因の一端に学区制があるといっても過言ではない。
- ・ 現在、学区外からの入学を希望する者は、3%枠を活用するか、総合学科に行くか、私立に入るかということになるが、東京での都立高校離れが宮城県でも浸透していることは周知のとおりである。

佐藤則之氏

- ・ 学区撤廃賛成の理由を述べる。
- ・ より広範囲における学校選択が可能となり、個性や能力に応じた教育が進み、子どもの主体性・積極性が発揮される。
- ・ 今は家庭経済も以前より安定しており、子どもの数も少なくなっていることから、親の子どもの将来に対する期待は大きくなっている。通学費や学費で学校を選択しなければならないというのは少なくなっているのではないかと考える。
- ・ 高校選択を自由にすると、地方の教育が見直されることにより、都市部と地方の教育格差が減少する。学区撤廃で特定校への集中が懸念されるが、そうならないよう各高校が努力することになることが期待される。
- ・ 宮城の学力水準が低いことも理由の一つである。地方からよりレベルの高い都市部の学校を目指しても、学区の枠に縛られ、学区内での選択しかできないようになっている。
- ・ 学区制が高校教育の機会均等という枠に縛られてきたことにより、教育の質については、都市部と地方の開きは大きくなっている。
- ・ 地方では努力しなくても誰でも高校に入学できるようになっており、中学校でも指導の質の向上に対する努力が少なくなっている傾向にある。県全体の学力向上には地方のレベルアップが必要であり、高校選択の自由は地方の高校・中学のレベルアップにつながる。
- ・ 都市部と地方の学校間に教育格差が生じていることに対する行政の認識が深まり、対策が講じられる。高校が希望されない学校とならないよう努力することとなり、県教委でも対策が講じられることが予想され、その結果、地方の教育力が向上する。

< 質 疑 >

櫻井弥生委員

遠距離通学した経験者として何が大変だったか。経済的問題がある子どもに対してどのような対策があればよいか。

松本純氏

学割をもらっていたので汽車通学の場合は、バス通学や親が送迎する場合よりは、高くはないだろう。

岩出山から通学したときは、片道1時間半くらいで、朝早く、夜遅かったので列車の中で勉強した。通学費用のこともあるが、高校生にはエネルギーがいっぱいあるのではないかと思う。

山田光彦委員

学区を撤廃した場合、仙台一極集中が本当に起きるのか。特色づくりをして、しっかりした高校ができて一極集中になると思うか。

山本明德氏

現在の仙台の倍率が1.5倍になっているのはなぜか、この現状でいいのか。一極集中は起きるかもしれないし、起きないかもしれない。

佐々木悦子委員

伊具高校の生徒が花や野菜を売って楽しく、地域の中で生き生きしているとの話を聞いた。空洞化とか過疎化を心配している地域の方もいるだろうが、他の地域から来た者がそこで学んで定着するということもあるのではないか。みんなにも譲ってあげるチャンスにならないのか。

学区制がなくても特色づくりは必要だが、学区制がなくなったとき、特色づくりが難しくなると考えているのか。

鈴木圭氏

特色ある学校というが、進学したい人は進学でき、就職したい人は就職できることだと思う。子どもの希望をかなえられる学校にしてほしいと思う。

居坂幸氏

地域が生かされることが少なくなっているように感じる。他の地域でも学校も地域とのつながりがあるのではないかと思う。地域に高校があると、地域が潤い、満足感がある。

佐々木悦子委員

自分の地域に高校がなくなること心配しているのか。

居坂幸氏

地域の子が地域の学校に入れるのがよい。

山本明德氏

通学の便がよい子は、受験すると思うので、仙台一極集中する懸念を持っている。今は学区制があるためにその中でがんばっているものの、学校の努力はあるにせよ、その子たちが仙台に行ってしまう、その結果、地域の学校の統廃合などが進む恐れがある。

佐々木悦子委員

学区制がなくなったとき、特色ある学校づくりをするのにどうすることが難しくなるのか。特色ある学校づくりをする上での弊害、どうしたら魅力ある学校づくりができるか考えるか。

櫻井弥生委員

仙台に行くのは魅力があるからであり、地方にも同じ魅力があれば、仙台には行かない。そのためにはどうしたらよいかということを知りたい。

山本明德氏

学区撤廃がなければそのまま特色づくりをすればよい。委員は撤廃を前提に話している。委員は特色ある学校づくりをどう考えているのか。角田高校では、文武両道といいながら、進学率向上との特色づくりの下で生徒は疲れ果てている。

小野寺征人委員

一極集中で地方の高校にマイナス影響を与えるのではないかと指摘についてどう考えるか。

佐藤則之氏

私立と公立の違いは、私立の方が学校経営がしっかりしていることだと思う。公立だと校長が2、3年で代わってしまう。その高校をどのようにしていくかを誰が決めるのか見えない。

一極集中にならないよう、例えば、地方校に特別進学コースを作るとか、お金をかけて仙台に行かなくても済むように、特色ある学校づくりに向けた学校の方針をしっかり作るべきである。

佐々木義昭委員

学校間競争、切磋琢磨することは悪いことだと考えているのか。

山本明德氏

切磋琢磨は個人同士で互いに励まし合うことである。学校での切磋琢磨とはどういう状況をいうのだろうか。進学率がどの程度か、有名校に何人入ったかが切磋琢磨といえるのだろうか。これは、紛れもなく学校間の競争ではないだろうか。学校が進学率にばかりに目を向けると未履修問題などが生じる。

小野寺征人委員

生徒の選択機会を増やすこと、生徒の希望をかなえることについてはどう思うか。

鈴木圭氏

中学校3年生がどこまで選択できるのだろうか。答申にはニーズの多様化と書いてあり、だから全県一学区という論調になっているが、理数科に行きたいと思ってもそういう学校が揃っていない。全県一学区といっても、実際に希望する学校に通えるかは疑問である。

藤村重文委員長

反対意見としては、一極集中、序列化が多く、親の負担増、学力と経済格差が生じるとの指摘があるがどう考えているのか。

高沢忠義氏

子どもが優秀であれば大学に行かせたいというのは、親の一番の目的である。

松本純氏

中学校のとき予備校に中学浪人がいたが、中学浪人はつらいものである。二次募集するなどしてきっちり穴埋めすればよいのではないかと思う。

藤村重文委員長

賛成意見として出ている学校選択の自由や生徒の希望をかなえることについてどう考えているか。

山本明德氏

入れる高校ではなく、子どもの生き方を考えた、きちんとした進路指導が重要である。拡大と撤廃は違う。5%なり、10%に拡大してもいいと思うが、撤廃すると戻れない。

<傍聴者からの意見>

一般傍聴者

現在の高校に格差があるのでこうした問題が生じている。高校の格差をなくすよう県教委が努力してほしい。